

〈私の研究〉

日本語史 文献学 philologie

望月 郁子

『類聚名義抄』を手がけ始めたのが三十代の後半。以後、約三十年を『類聚名義抄』を中心に平安から鎌倉期の古辞書と取り組んできたのだから、私の研究といえば、やはり古辞書の研究となるのだろう。『類聚名義抄四種声点付和訓集成』（一九七四年）・『類聚名義抄の文献学的研究』（一九九二年）・『仏教界に辞書は在ったか―古字書の新研究』（一九九九年）を出した。

近著については、小松英雄先生の書評を本学人文論叢第65輯に戴いた。私の研究を私自身の自覚よりもより正確に示されている。よく見ていただけているのに感謝する。著者の反省を言えば、「字書」（字形分類の漢字の辞書）という専門用語に対する読者側の理解を著者が期待し過ぎていた。何人もの読者に書名の意図することが通じなかったらしい。

誰でも自分のことで精一杯だから、人のことなど分かうとしない。六年前二松の国文に赴任した当時、まず感じたのは、「アクセント史専門？」であった。やってきたことを理解されていたかどうか。古辞書の研究書なぞ手にする必要がないということである。二松を非難しているのではない。現実をいっているのだ。

『名義抄』といえば「声点」、「声点」といえばアクセント史という風潮は依然として強い。『名義抄』は部首分類の漢字の辞書である。漢字毎に字音注と語義の注がある。観智院本の凡例「片仮名有朱点者皆有証拠亦有師説」の通り、朱声点は、和訓の信憑性を示すのが第一の役割である。アクセント史研究の為に、観智院本が作られたのではない。

辞書として一つの文献である。一つの文献としての全体的な把握がなされなければならない。全体的な把握とは、標出漢字、音注（正音注・和音注・呉音注）、語義の注（漢文注・和訓）、字の注、声点、合点―それらの全てに涉って、包括的に把握することを言う。研究者は、一つの専門領域に止まることは許されず、一人で多領域に涉って研究しなければならない。専門分野が細分化される現在、このような主張は、他分野侵入と嫌われる向きもある。

筆者は、和訓の仮名の声点から入って、漢字音（同音字注）に取り組んで観智院本の声調体系の解明につとめ、次には観智院本の和音注が法華經字彙に集中することを明らかにし、一方、漢文注を手がかりに観智院本の依るべき典拠の中枢を占める文献が空海撰『篆隸万象名義』であることを突き止め、『和名類聚抄』の引用の仕方：などと、いくらか多面的に論じてきた。各論を通じて、テキストとして信憑性の高い図書寮本と、観智院本の対応箇所との対比検討という方法を採用、観智院本が図書寮本とは別の独立した文献であるという結論に達した（以上、『類聚名義抄の文献学的研究』の一部紹介）。「何が専門か」と聞かれて「文献学の立場で『名義抄』をすこし…」という所以である。

観智院本の全体的把握をめざして行き着いたのが古辞書それぞれの制作目的であったこと、小松先生の書評の通りである。

頭の中にある古辞書の引き出しに鍵を掛けると、自動的に開いたのが『源氏物語』の引き出しであった。古辞書を見てきたのと同じ姿勢・同じ意識で『源氏物語』に接すると、『源氏物語』という一つの文献の底流に『皇統の血の堅持』と『女人往生』との二つがありそうな気がしてきた。目下、源氏にうつつをぬかしている。「国語学のくせに文学に口出しする」のではない。〈文献学〉の対象が動いただけである。一つの文献のことを丁寧を読むとどうなるか、自分の『解釈』を試したい。『源氏物語』は大切なことをさりげなく語る。どこに読み落としがあるか、恐ろしい。「君達は読めない！」院生時代、源氏の授業中、何度も聞いた非常勤講師かつ指導教授であった大野晋先生の声が聞こえてくる。

この稿の読者は？ そうだ、最多数は学部生だ。調子を変えます。学歴社会を独力で生き抜けるだけの学歴も持たず（現にどの学会へ出席しても、先輩後輩がいない）。女性と生れ乍ら、お嫁にも行かず、子育てもせず、この年齢までとにかく生きてきた。大学は男性社会である。〈男の仲間に女が独り〉が永かった。空きポストに女性を採用されると嬉しかった。〈女はダメだ〉という口実を与えまいと、肩をいからしてきた気がする。今でもそれが抜けない。五歳、十歳以上若い女性たちは、対男性をそれほど意識せず、人間対人間で助け合い支え合う共存の姿勢が板についている。自然でいい。

私とて、こんな生き方をしなかったのではなさそうである。女性であるが故の逃げを生きた結果がこうなった。『大学進学』を軽くし

か考えなかった。『一生の仕事』に直結させて考えなくてもすむのが、女性の特権である。お嫁に行くのだからそれまで好きなことを格好よくである。高校時代、古典文法は得意だったから、源氏物語は好きで持ち歩いてはいた。しかし、近代文学となると、ヨーロッパ一辺倒でドストエフスキーのヘッセのカミュのと読みあさっても、日本の明治以降は何かチツポケな感じがして目もくれなかった。女子大の英文科に進学。そこでは、経済的独立がない限り精神的独立自由はないという現実認識を得た。また、文学研究の方法としての *imagery, poetic image* の新鮮さを体感した。反面、キリスト教の原罪がどうにも理解できず、ヨーロッパは不発に終わった。都内の私立の中高校で英語を教えながら、夜間大学院の日文に籍を置き、比較文学を夢見たが、大野先生に *imagery* なんて自分で分かってもないことが独りで出来るはずはない……と国語学を勧められた。修士終了後、親の家に帰った。『岩波古語辞典』の原稿執筆に参加。この作業が勉強になった。三十歳を越えてから、教職再出発。論文を発表しなければと覚悟を決めたのはそれ以後であった。「イニシヘ・ムカシ考」「類義語の意味領域——ホドをめぐる」など語彙の論文でスタートした。

学生の皆さん、諦めないで情性で研究してください。

なお、老いて「能」の舞台も楽しみたい。